

文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

【調査研究の評価軸及び評価指標等】

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財（美術工芸品、建造物）及び伝統的建造物群に関する調査研究 【自己点検評価：A】

本項について30年度は対象となる6件の調査研究の年度評価は「A」4件、「B」2件であり、美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は対象となる5件の調査研究について、下記の成果により「A」と評価した。</p> <p>美術工芸品については、近・現代美術に関する調査研究において、とくに女性画家や美人画家への関心の高まりに合わせ、栗原玉葉、武村耕靄といった、これまで殆ど等閑視されてきた女性画家について、新出の作品や未公開の日記等の資料を調査し、研究所内研究会や研究誌『美術研究』をはじめ、所外の展覧会やシンポジウムでも研究成果を発表、その画業を丹念に追いながら明治から大正にかけての女性画家の経済的基盤を明らかにするなど、30年度中に大きな進展を得ることができた。また、文化財に関する調査研究成果及び研究情報の共有に関する総合的研究においては、アメリカのゲッティ研究所が運営するゲッティ・リサーチ・ポータルに29年度よりアジア諸国から初めて情報を提供し、2年目となる30年度は『日本美術年鑑』、『美術研究』、『保存科学』など東京文化財研究所刊行物の過去83年にわたる刊行物の全文データ546件を公開し、これまでほぼ日本国内のみに限られていた研究成果の公开发信を世界的に増強した。国内外の関係機関と連携しながらオープン・アクセスのコンテンツを増やすことで、日本の文化財研究の専門性の高さ、ひいては日本の文化への理解促進に貢献した。またこの成果について、当初の予定にはなかった、国際美術図書館会議（於アムステルダム国立美術館）にて口頭発表し、ゲッティ研究所をはじめ国内外の関連機関からも高く評価され、さらなる公開コンテンツの増大と研究推進を発展的な軌道にのせることができた。</p> <p>建造物については、法隆寺古材調査のとりまとめにより古代建築の技法を明らかにするとともに、岡山県津山市の伝統的建造物群調査によりその価値を明らかにして保存方策を含む報告書を作成した。また、大阪府大阪市の綿業会館の調査により文化財保護法の改正に対応した保存活用計画を作成した。</p> <p>以上のことから、30年度は、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に高く寄与することができた。</p>
評価軸：有形文化財の保存修復等に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は対象となる1件の調査研究について、下記の成果により「B」と評価した。</p> <p>薬師寺所蔵の歴史資料について長年の調査研究の成果として目録を公刊して全貌を示すとともに、春日大社関係の大宮家文書や興福寺関係資料をはじめとする諸社寺の歴史資料及び書跡資料の調査研究を進め、それぞれの内容を明らかにすることができた。</p> <p>以上のことから、30年度も有形文化財の保存修復等に寄与することができた。</p>

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

【自己点検評価：A】

本項について30年度は対象となる3件の調査研究の年度評価は「A」2件、「B」1件で、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は対象となる3件の調査研究について、下記の成果により「A」と評価した。</p> <p>無形文化財の保存・継承に関する調査研究においては、演奏機会の少ない重要無形文化財の宮菌節について、29年度より宮菌千歳氏（重要無形文化財・各個認定）等への綿密な聞き取り調査等を実施し、これを進</p>

	<p>展させ、30年度に記録作成を開始することができた。当初は古典曲の記録を念頭に置いていたが、聞き取り調査を進める過程で、「新曲」に分類されるレパートリーの演奏機会が特に少ないとわかったため、30年度は古典曲に加えて新曲も記録作成（各1曲）し、今後の進展が期待できる調査研究を実施した。記録作成に係る事前事後の聞き取り調査は今後も積み重ね、その概要を取りまとめて31年度公開すべく継続的に取り組む予定である。また、30年度の楽器製作・修理技術調査の概要は「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告2」（『無形文化遺産研究報告』第13号）で発表し、ウェブサイト上での公開も進めているが、調査により「楽器製作に特化した道具の製作技術」及び「楽器素材としての竹材が直面する課題」が明らかになったため、調査対象を拡大し、目的を特化した手作りヤスリの製作者及び楽器に使用する竹の伐採から販売を手掛ける製造者への聞き取り調査を追加実施し、併せて前掲報告で取り上げた。31年度は後者の楽器素材としての竹材研究を、楽器製作者や竹材製造者に演奏家、音響学の専門化等を加えて開始する予定であり、楽器製作・修理技術に関する研究の更なる進展に向けての礎を築くことができた。</p> <p>無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究においては、現在全国で問題となっている継承の危機をテーマに31年度の「無形民俗文化財研究協議会」を開催し、想定を超える183名（29年度は132名）の参加を得た。その成果は報告書として刊行した。さらに継承の危機と活用に関わる課題を伝承者から直接聞く機会として、「祭ネットワーク」を2回（昨年1回）開催し、祭礼・芸能関係者とのネットワークを強化した。</p> <p>以上のことから、30年度は、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に高く寄与することができた。</p>
--	---

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

【自己点検評価：A】

本項について30年度は対象となる17件の調査研究の年度評価は「A」7件、「B」10件であるが、平城宮跡・藤原宮跡の継続的な発掘調査において、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与する大きな成果をあげていることや、水中文化遺産の調査法の確立に大きく寄与する発展性のある成果をあげたことなどから、全体としてAと評価した。

評価軸：記念物の保存・活用に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる2件の調査研究についていずれも「B」評価であり、下記の成果により全体としてBと評価した。</p> <p>遺跡整備・活用研究集会を30年度は「史跡等の保存活用計画」をテーマとして開催し、文化財保護法の改正により法定となった保存活用計画の作成に当たっての技術的な課題等を共有することができた。また、29年度の研究集会の成果をとりまとめた報告書「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」を刊行し、成果の活用を促進した。</p> <p>以上のことから、30年度も記念物の保存・活用に寄与することができた。</p>
評価軸：古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる10件の調査研究について、「A」評価5件、「B」評価5件であり、下記の成果により全体としてAと評価した。</p> <p>平城宮東院地区の発掘調査では、国内でも初となる8世紀の調理用の地上式炉跡とみられる遺構が検出され、東院の厨施設の実態を解明できた。平城宮東区朝堂院東門の発掘調査では、奈良時代後半の東門の正確な規模の確定と奈良時代後半とは規模・構造の大きく異なる奈良時代前半の様相も明らかにすることができ、さらに東区朝堂院全体の規模を確定できた。</p> <p>藤原宮大極殿院地区の発掘調査では、大極殿院北面回廊を検出し、北門の存在を確定するとともに、その構造が南門・東門とも異なっていたことを明らかにすることができた。</p> <p>いずれも古代日本都城の解明等にかかる多大な調査研究の成果を得ることができた。</p>

	以上のことから、30年度も古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与することができた。
評価軸：文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は対象となる1件の調査研究について、下記の成果により「B」と評価した。</p> <p>文化的景観と考古学との関係をテーマとした文化的景観に関する研究集会を開催して、文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化を進展させることができた。また、京都市等の現地調査・研究では保存計画や整備・活用計画の策定について検討を深めることができた。</p> <p>以上のことから、30年度も文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与することができた。</p>
評価軸：埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる3件の調査研究についていずれも「B」評価であり、下記の成果により全体としてBと評価した。</p> <p>古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会では、従来注目されていなかった官衙・集落出土の大型貯蔵具に焦点を絞り、各地域・遺跡での出土様相や使用形態などの特徴を抽出する作業を通じて、大型貯蔵具の特性及び遺構・遺跡の歴史的意義づけを論じることができ、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。</p> <p>古代瓦に関する研究集会では、従来の軒瓦のみを対象とした研究ではなく瓦の製作技術そのものに注目することにより、瓦生産を総体的に検討し8世紀における中央と地方との関係の具体相を把握することができ、瓦を通じて古代社会の実相にさらに迫ることができた。</p> <p>以上のことから、30年度も埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与することができた。</p>
評価軸：水中文化遺産に関する調査研究に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる1件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「A」と評価した。</p> <p>発展途上にある日本における水中遺跡の調査研究において、市町村教育委員会においても遺跡の状況を把握することが可能な、安価で簡便な調査法の確立に見通し得ることができた。また、鷹島海底遺跡の元寇船の水中での現地保存に迅速に対応し、発展性の高い埋め戻し法を開発することができた。</p> <p>以上のことから、30年度は水中文化遺産に関する調査研究に大きく寄与することができた。</p>

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	東文研	14.8	13	12	14		
	奈文研	71.4	37	61	56		
	計	86.2	50	73	70		
報告書等の 刊行数	東文研	1.4	3	3	9		
	奈文研	25.2	16	15	13		
	計	26.6	19	18	23		

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発

【自己点検評価：A】

本項について30年度は対象となる4件の調査研究の年度評価は「A」3件、「B」1件であり、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に高く寄与することができたことから、全体としてAと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる4件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「A」と評価した。</p> <p>デジタル画像の形成方法の研究開発において、媒体が脆弱で劣化が進み、資料情報の保全に緊急を要するガラス乾板からの画像取得については、これまでの光学的調査研究の実績を踏まえ、東京文化財研究所所蔵のみならず鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板（重要文化財）など、30年度は外部機関が所蔵するガラス乾板を対象に、緊急性に呼応した画像取得を実施することができた。画像取得にあたっては、一般的に用いられるスキャナではなく、撮影時に膜面に触れる恐れがなくガラス乾板を傷めにくいカメラを用い、カメラメーカーとも共同して、ガラス乾板からの画像取得という目的に特化したソフトウェアやカメラ等の機材のカスタマイズを行った。さらに、ガラス乾板から取得したデジタルネガの明暗反転にとどまらず、被写体や調査目的に応じた明度の調整を行うなど、東京文化財研究所独自の調査手法による鮮明な画像を取得できた。このことは、今後、鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板の被写体でもある、失われたり状態が著しく変化した文化財の撮影当時の状況の詳細な観察や、色彩の再現といった調査研究への応用も期待できる成果である。</p> <p>埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発においては、地方公共団体等で簡便かつ廉価に導入可能な方法を開発しており、研究発表や講習会開催などによる成果の普及を行うことで、これまで取り組んできた遺跡・遺物の詳細なデータを従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録する手法を普及段階に進めた。</p> <p>年輪年代学研究においては、出土遺物、建造物、美術工芸品等の多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代調査・研究を実施しており、従来は年代測定を目的に活用されてきた年輪年代学的手法を木簡の同一材推定に活用し、接合する削屑の事例を見出すなど、研究手法の応用を進めた。</p> <p>以上のことから、30年度は、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に高く寄与することができた。</p>

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

【自己点検評価：B】

本項について30年度は対象となる12件の調査研究の年度評価は「A」4件、「B」8件であり、計画通り、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与できたことから、全体としてBと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。	
成果	<p>本評価軸に対し30年度は、対象となる12件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「B」と評価した。</p> <p>文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究においては、歴史的木造建造物における環境低負荷型の殺虫処置方法である湿度制御温風殺虫処理について、日光山中禅寺鐘楼で国内2例目となる現地処理を実施した。また、その際に東京文化財研究所が開発した殺虫処理効果判定システムを導入した。</p> <p>文化財の材質・構造・状態調査に関する研究においては、煉瓦造建造物に析出している塩類の可搬型X線回折分析装置を用いたその場分析の結果と、周辺の温湿度環境・レンガの含水量との比較により、劣化と保存環境に関する検討を行った結果を学会で発表した。</p> <p>文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究においては、油污損の文化財クリーニングへの適用などを目的に、ゲルを使用した場合の現場適用方法を検討した。汚れの除去効果に加え、作業環境の評価も行い、安全な有機溶媒の使用方法を調査した。</p>

	<p>キトラ古墳壁画保存管理施設の運用・管理、高松塚古墳及びキトラ古墳壁画の調査及び保存・活用を効率よく実施するとともに、被災装飾古墳の調査についても随時、臨機応変に対応した。また、国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳地区の運用が開始された後、キトラ古墳の整備に関する報告書を作成した。</p> <p>以上のことから、30年度は、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与することができた。</p>
--	---

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	東文研	16.4	18	17	16		
	奈文研	26.2	34	50	38		
	計	42.6	52	67	58		
報告書等の 刊行数	東文研	5.0	5	5	5		
	奈文研	2.6	1	3	1		
	計	7.6	6	8	7		